抽齋塗稿
徳語

全

E39
31

拙齋吟稿

庚子元旦

あら玉の年みえしめに結ふ身も
御代の恵にもれぬ嬉しさ
ふ子振稀の御代より年をに
又立帰るあら玉のえる
新玉の春来るらし梅か枝に
まふく鶯声のとけきを
年をまけふ立初る春かすみ
人の心ものとかふりなり

E39/31
東京帝國大學圖書
B 23475

正月十日江戸橋の上より夕陽を
拝す

天照る神を橋よりおろかめは
影かゝりまた富士の山際

七五三縄

澳つ鳥鴨居にかけし稲からの
しりくめ縄よれふとくなるかな

柳島玉廬

川そひの柳かしはにまた君を
よ代百代といのるそのハ

述懐

みそちはまりむとせのそをたとりきて
なにはまおろかの己か身かはらぬ

神鏡冠

大穴牟遅少彦名のことより
くすしきを傳へきしかも

同諸友泛舟

まこと川舟乗しておのもく
三きのみかはしうちゑひのしれ

思無邪堂

やまとしまめらが筆をかしてくも
はふぎ見る身はいともちちふる
花の色月のひかりも虫の音も
とうきむまひの神のこころまか
志むざちふ読残歌の言の葉を
とそしへやまきあま名つけな
かちむの聖の花をつくくまて
よあしまのふきは代々えつける
むちはふ所のおしくをまならあん
くしの道とてとまやはる

春雪

適得清酒一樽銘曰花王詩中及之

六柳街頭藍水涯容安茅舍蓬蒿宅瓶中斜挿梅一
枝几上徐繙三巻冊獨酌花王賞味佳遥望雪徑儒
寒劇怏然終日俟来朋向暮帰鴉鳴唖〻

偶成

昇平二百有餘年率土億民槃鼓腹食稲衣裘宰我
安殺雞炊黍季由宿白庵欣雪走奔〻魯兒擬優喧
僕〻富貴任天勿羨望忘貧獨醉咲蘆菔
交朋有信致身君造次不忘於斯文疏食敝袍仍旧

貫輕裘肥馬若浮雲簞瓢雞黍先生饌切琢磨礎弟
子勤終日放言〻侃〻斗胷便儕叵同羣
祝太平
巍〻粤若同天德率土濵民無不臣賜雨有恒農事
得尤攸士師敘彝倫
述志
三十七年如一瞬学醫傳業薄才伸榮達窮達任天
命安樂換錢不患貧
失兒　辛丑二月
臍風起兮魂飛揚兒出胎内帰故鄉安得名醫探奇
方
好女因緣原不好傷霜蕾子凋殘早人生自是比蜉
蝣兒誕未臻離襁褓堪哭七宵纔始過翻思百歳誰
可保淡然何羨老彭身破惑除迷忘壽夭
未歷一旬遂下殤堪憐消落速春霜舁棺輓卒輕為
喜擁乳細君悲不忘既入佳城壙露淨将臻彼岸路
程長誰身壽夭何可限人世無常自是常
雪中春酌
辛丑閏正月廿日宿題
遥隔小窓看霏〻雪滿欄俟朋〻不至獨酌避春寒

は世中かうるほふ春の白雪は
うきしこゝはしさむさをすれん

瓶梅

春雪堅氷寒透肌郊園野徑百花遲飄然撲鼻香風
轉顧見瓶中梅一枝
久方の天きる雪をうきなて
まれなるしまに折なら梅

雨後對月　辛丑五月廿日

恐溼多焚赤朮挙杯頻啖蘆菔一宵天色纔晴写出
松間片月

五月雨の軒乃雫も音たえて
雲間をもるゝ月のさやけさ
晴るなきさこそれ空の名残なく
今宵の月まうさを忘れつ

葵花

諸人のうち春はふひをわかなの
園生は植てなるなれしき
よしあしもいふふるすに葵くを
愚なる身のさとらぬそうき
醫学講官の命を蒙りし時

思はさる道の誉にましてなほ
君の恵み深きをそしる
百ちあまり借へし人の名を揚るも
くましき左の教にそよる
たらちねのいはさぬをうれ玄系の
誉をかけしうれしさにつけ
りけましくもかしこき作りてふりて
おろかなる身整れきなき
其のふをわけて読人を
おろかなる身のいつにかへん

ふまふる神に祈りて君かため
其名くこきぬをしそ思ふ
遠つおやの名をおほせしこ同し日に
君の作をあふくかしこさ

柳するも曲するなは三舎さけ
袋杖よりも緑の光りあり

備後豊田省吾業成帰郷其父號橘泉來歳
還暦兒恒善代予絶〔賦〕一絶以換送詩
花甲重逢於兔年〻來圭匕橘邊泉知君受命生南
者鶴算龜齡固得天

甲寅元旦
生仕死休余若彼食清眠起人如此卌九年上不知
非還悟今朝渾未是

朝興夕寐人皆尓飢食寒衣我豈違五十年來知未
得如何天命是乎非

甲寅十月十三日初觀醫心方全部三
十巻
大少二神創此業和丹双派世名譽逢時韞玉開櫜
出喜写皇朝第一書

乙卯元旦
初旭将升霞色新講書迎歳二六春仰君懷祖尤堪
拜五秉恩風殊潤身

乙卯十月二日地震
天地震揺楹忽折身埋屋下生幾絶妻孥無恙僅安
魂欽仰

君恩愁轉悦
月よりも炎照そふ空合に
猶すさましき冬の夜の星

丙辰元旦
新年新宅賀新陽旧歳旧殃禳旧兆地揺雷霆及灾
祥都被春風吹却了

丙辰至日偶成　竊贈石居
金沈罌水玉埋崑岡日月猶蝕人何得常菅公遇譖
屈原獨清従古為患如今仍冥可歎勿怨青蠅営々
諸君自愛待天之明

かねてまつ手力雄神のいつらかて
その岩戸を引ひらくる春
文の花さはし絶るもあちきなや
花鳴鳥のなしふけうし
久方の光りをおほふむら雲を
ちらさむ風の吹きらめやは

丁巳元旦
九名八口迎年二族従親統全几上攤書卅巻牀頭
繙帙千篇弱齢且畏先覚老歳尤怩後賢無奈元来
拙劣如今仍特蠢然

為人治病勿厭悪姿得酒所使卓犖叵羈尤要專壹
汲〻孜〻学術該備上工可期 用説文語
靈樞素難神農經金匱傷寒扁鵲倉秦漢七書該通
了新年先試酒三觴
軒帝農皇文秦時且免焚如今猶馥芬從古不紛紜
奉命講論勤研精微妙分牛毛思報君雞肋忝連員
黒衲賀新雲朱杯映初昕妻孥交洽欣椒酒更醺〻
檐頭殘雪映朝曦瓶裏新梅撲鼻薰堪耻老來無少
動屠蘇東戸覚微醺
初旭輝朱簾東廂從少始三年未学易無大過之冀

送旧殘燈見睍消迎新嫩柳入春嬌伸衣黒襖清修
了椒酒賀正先謁朝

拙齋吟稿 終

懲語 未定稿

凡学問の道ハ六經を治め聖人の道を身に行ふを主とする事は勿論なり故その六經を讀明んとするにハ必その一言一句をも審に研究せざるべからず一言一句を研究するにハ先善本を多求て異同を比讐し誤謬を校正しその字句を定めて後に文字の音義を詳にする事肝要なり。文字の音義を詳にするにハ小学に熟練して義理始て明了なる事を得

「治小学之道有三曰正字曰訓詁曰通字正字者

学説文而知之亦有正形正義之別正形者謂依篆体正隷俗也正義者謂依本訓知假字也訓詁者学尓足而知之通字者詳轉注叚借之意而知之」

譬ヘバ高に登るに下きよりし遠に至るに近きよりするが如く小学を治め字句を校讐するハ細砕の末業に似たれども必是をなさゞれバ聖人の大道微意を知る事能はず小学を治るハ六書を明むるを専務とす六書の指事象形會意形声の四ハ説文解字に詳なり轉注假借の二ハ尓

足以下訓詁の書及諸子百家の書の用字此法を察して知得べし故に百家の書讀ざるべきものなく左すれバ人間一生の内になし得がたき大業に似たれどもその内主とする所の書を専讀むを緊務とすそれハいづれにも師とする所の人に從て教を受べき事なりさて右のごとく小学に熟練して後に六經を窮たらんにハ聖人の大道微意に通達すること必成就すべし聖人の大道微意に通じたる上にて、六經小学諸子百家の書ハ一切廢棄して取ざるも可なり以得魚兎而忘筌

蹄の論あるも此わけなりしかし是に人との
讀破したる上の見識にあるヿなり右の如く論
じたるハ讀書の業机上の談なり身行心術に在
てハ聖人の道を宗とするハ勿論なれども但そ
の世に在てハ今の世の風俗に從ひ人情にはづ
れぬやうに心懸べし文才のある人ハとかく俗
情に異なるヿをなし俗に所謂ひねりものにな
るもの也行住坐臥飲食衣服室屋器皿其の外万
事當時の風俗に違はぬが学力の高き所なり殊
に神祇佛法巫覡禱請等の事を愚俗の迷心とな

十

して哂ひ謗るを学者の常なり是亦然るべから
ざるヿ也是等ハ人生有限の智にて測るべから
ざる天地間微妙の事なれバ拘執して惑はざる
ゝハ愚蒙の至なれども但天地自然神変不思議
の事となして論ぜざるが夫子不語怪力乱神の
意なりある聖人の道と事ゝして云共前にいへる
如く六經を讀破したる上にてハ論語老子の二
書にて事足なりその中にも過猶不及を身行の
要とし無為不言を心術の掟となす此二書をさ
へ能守れバそむヿなり但論語の内にハ取捨す

べき所なり王充書の問孔篇及迷庵師の論語數
條を論じたる書なり皆參攷すべし以上如此の
論は人の假に知る所にして贅言妄語なれども
頃日或人の訪來りて學問を論じたるに就ての
答をなせり夫孝悌忠信の事の如きは衆人の
心とする所言を待ずして知べく且聖人の道と
いへバ百行その中にあるなれバ今唯学者の
心術を治め見解を定め小学を業とし百家の書
をも讀得されバ叶はぬ事を提擧して及門の諸
子に示す然り何の言ふてもいはひでもの事

やくたいもなき事と云爾天保辛卯季秋抽齋酔
睡中に囈言す

[保云当時抽齋二十七歳]

附記質吻餘

大辯若訥聖人為腹不為目の二語をミ
て今世俳優訥升の腹を主とし技を擇
とするは老聃の意を得たる者と知る
べし

或人難じて曰子老子を崇め称するは不審なり
道家を治るものは父母妻子を離れ恩愛の道を

も弃て只一已の身を修め長生不死を求る事聖
人の意に背くと云べし論語と並称するハ如何
予答て曰一已の生を養ひ長生を求るハ仙人の
術にして道家の意にハ大に異なり清の孫星衍
の説をミて知るべし乃左に記す

抱朴子序

「保云此序文、稿本にハ載せず」

又按するに老子自然無為の道~~を説く事孔子の~~は
道と異なるに似たれとも其帰する所ハ一意な
り孔子の不患人之不已知曾子の有若無実若虚

など、云へる皆老子の意に近し且自然と云る
万事にことよりて然ざる事を得ず迷庵師云天も
自然地も自然云々 ——

「保云此以下亦略して載せず」

附記

北齊顔之推云吾昔初看説文蚩薄世字従正則懼
人不識隨俗則意嫌其非略是不得下筆也所見漸
廣更知通変救前之執将欲半焉若文章著述猶擇
微相影響者行之官曹文書世間尺牘幸不違俗也
此章ハ世俗人情に違はぬがよしと云へる意

あり
晏子春秋云景公出田顧而問晏子曰若人之衆則
有孔子焉乎晏子對曰有孔子焉則無有若舜焉則
嬰不識公曰孔子之不逮舜爲間矣曷爲有孔子則焉
則焉無有若舜則焉則嬰不識晏子對曰是廼孔子之所
以不逮舜孔子行一節者也処民之中其過之識舜
者処民之中則自齊乎士処君子之中則齊乎君子
上与聖人則固聖人之林也此廼孔子之所以不逮
舜也
此章を提挙するハ老子の和光同塵の意と符

合すれハあり

迷庵師讀書指南序

「保云此序文稿本ニハ載せず」

此文ハ学問の大道を論する故ニ此ニ挙

「保云稿本止此」

十